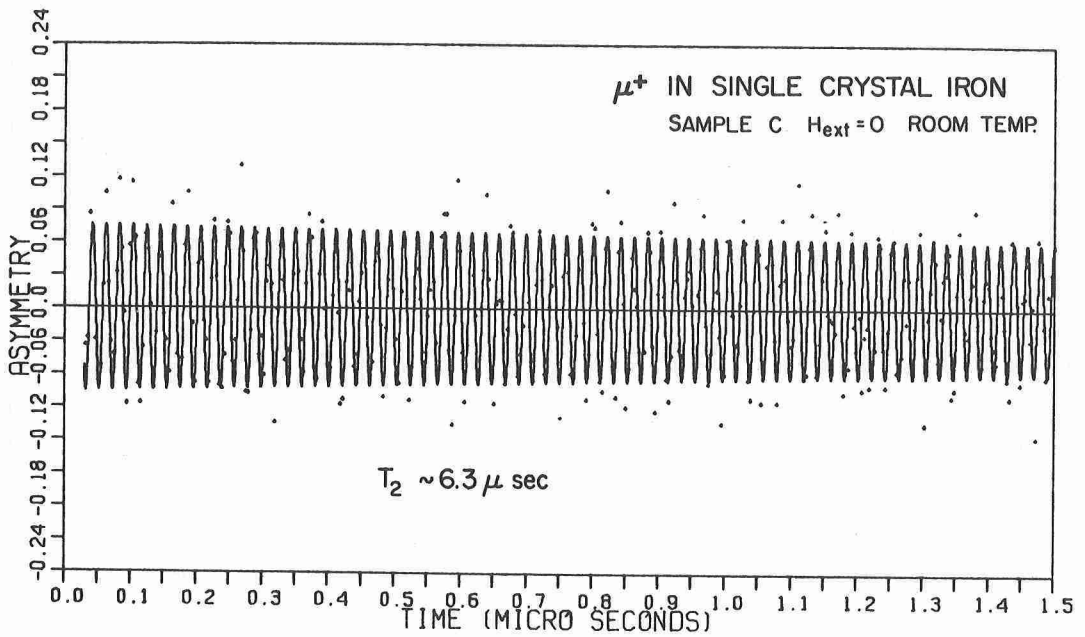


# 廣報

東京大学理学部

## $\mu^+$ 中間子のスピン回転パターン



### 目次

ある感想	久保亮五	2
久保亮五先生	鈴木増雄	3
地理学教室を“卒業”するに当って	佐藤 久	5
佐藤先生お元気で	阪口 豊	7
雑談	浅田 敏	9
浅田 敏先生	佐藤良輔	10
タイベ・オアシス	小堀 巖	12
カキの生活戦略	鎮西清高	15
“数学は目の科学である”(補)	小嶋 稔	16
就任御挨拶	田村文雄	17
<学部消息>		17

## 《スペクトル》

### $\mu^+$ 中間子のスピン回転パターン

正ミュオン ( $\mu^+$  中間子) が単結晶純鉄の格子間位置での内部磁場によりスピン回転する様子を、 $\mu^+ \rightarrow e^+$  の崩壊によって空間的に非対称に放出される  $e^+$  のカウントの時間スペクトルから変動時間成分をぬきだすことによって示したもので、点は実験値である。カウントは 8 マイクロ秒にわたり 1 なの秒のきざみで行い、図のように単一のラーモア周波数成分をもつことがわかって、内部磁場は  $-3595.0 \pm 0.1$  ガウス と決定された。横緩和時間  $T_2$  (振巾の減衰時間) は  $\sim 6.3$  マイクロ秒であるが、これは正ミュオンの拡散とトラッピングに関する知見を与える。横緩和時間は試料の純度に敏感に依存する。

中間子科学施設 山 崎 敏 光

## あ る 感 想

久 保 亮 五 (物 理)

今のひとびとは寺田寅彦のものなど、どのくらい読むだろうか。先生は1935年暮に亡くなられたから、私も先生を知らない。だが先生の随筆は学生時代、大いに愛読したものであった。今でも、折にふれて書架から取出して寝がけに読む。いうまでもなく、寒月理学士は先生がモデルであった。私が学生の頃五月祭に、例の首くくりの力学の原論文を *Phil. Mag.* からさがし出して展覧したこともあったように思う。

寺田先生の衣鉢をついだ一人は平田森三（モリソーとよむ）先生だといわれる。私は先生に教わった、といえは2年の学生実験だけだった。簡単ではあるがむづかしい実験だった。平田先生の有名な仕事は割目の研究である。割目を論じてキリンの縞に及んだ話は、生物学者には受入れられなかったが、大へん独創的であった。また鯨うちの平頭銛の発明もあった。先生は御郷里が広島で、たまたま帰郷された折に原爆の洗礼を受けられた。電車の中におられ幸いに御無事であったが、そのためかどうか、1966年、定年退官の1月ほど後に亡くなられた。

もう1月半くらいで私も本郷での長い生活にピリオドを打つことになる。物理学科学生として、この一号館に足を踏み入れてから勘定すると41年である。その間、お世話になった諸先生、先輩、苦楽をともにした同僚、後輩、学生、その多数の人々の思い出が去来する。建物やまわりの景観もさることながら、人との交わりが、なつかしさと苦しさをまじえて浮ぶのである。

平田先生のことを記すのは、戦後のどん底時代の一つの思い出があるからである。どうして物理をやるか、やれるか、私たちは何年も何年も、苦しみと希望の混沌の中にあつた。私自身

は実験をしないから苦勞は少なかったが、それでも日本の物理の後進性をどうして克服できるか、大いに議論もしたし、努力もしたわけである。

そのような議論の中で、寺田物理学が檜玉に上がることがあつた。マッチ棒一本あれば実験ができる、と寺田先生はおっしゃったそうだが、それじゃ本物の物理にはならない、あそびの物理にしかならない、寺田物理学は日本の物理の成長を阻害したのではないか、という論であつた。私もその論者の一人であつた。寺田先生の無二の高弟であつた平田先生は、そんな議論もニコニコきいておられた。

乗鞍に宇宙線観測所ができたとき、御自身の研究には関係ないことだったが、先生はその建設と運営に献身された。後年、低温センターができたとき、先生はその計画から建設に骨身を惜しまれなかつた。先生のあとを受けて私はそのセンター長をやる破目になったが、病床で先生に後事を託された、ということ大げさであるが、最後まで御心配いただいたことは昨日のように思い出される。

寺田先生は *Laue* 像を螢光板で観察し、*Bragg* と独立に *Bragg* 条件を得た。また寺田先生の示唆によって西川正治先生は先駆的なスピネル構造の研究をされた。これは *Laue*、*Ewald* らの歴史的な仕事からほんの1,2年の後のことであつた。当時の日本の物理学が「正道」を歩んでいた証拠の一つであろう。寺田先生はその後、地球物理学に主力を注がれたが、きわめて独創的な仕事を残された。

今頃、何で寺田物理学とか、マッチ棒一本などと言うのか、と叱られそうである。マッチ棒

一本は多分に誇張であるが、その意味はわかる。

今日の科学研究は非常に高価なものになってきた。道具立てもおそろしく複雑になり、ものすごく elaborate な器械を揃えなければならない。大加速器は、設備も組織も巨大工場であるが、それほどのものでなくても、20年前とは大ちがいである。

核分裂連鎖反応の最初の実験を Fermi らが行ったとき、連邦政府が与えた金は6,000ドルだった。その頃は物理学者の頭もおかしくなっていなかったのだから、これはとても莫大な金に思えた、と Fermi は言っている。日本の金に直して2万円足らず、今日の数千円には当ろうから、成程少なくはないが、あれほどの仕事にしてみればそれほど多くはない。

10年前かそこらまでは、物理の実験がいちばんお金がかかるように思われていたが、高価な物理的測定機器の発達によって（そればかりではないが）、化学、生物学、医学、工学の研究が高価なものになった。この頃では、そういう研究室に、物理研究室にはないような立派な器械が並んでいて、日がかげってきた物理屋を嘆かせている。

紙数も尽きたので落ちにしなければならない

## 久保亮五先生

鈴木増雄（物理）

この4月1日に停年退官される久保先生は、言うまでもなく、統計力学、特に非平衡統計力学の世界的第一人者であり、久保公式は、物性物理学に限らず、化学やその他多くの分野で、輸送現象とゆらぎを議論するときの出発点になる一般公式で、非常によく使われています。この輝かしい業績に対して、昭和48年度文化勲章

が、そこで寺田先生、平田先生を思うのである。ヒタ押しに大道を攻めてゆくにはそれ相当の武器が要る。竹槍では正面攻撃はできない。折角、日本の物理も底力を養ってきたかに見えるのに、低成長時代に入り、早くも頭打ちというのでは困ったことである。正面軍が陣容を整えないと、本物の物理学ができない。それはその通りである。

一方、本当に新しい地平をひらく仕事は、必ずしも、正面軍には与えられない。戦線が過ぎたあとの落穂拾い、といえは情けなくなるが、それはたとえが悪いのである。戦線が穴だらけであることは歴史が示している。

物理が進みすぎてやる事がなくなったかのように見える。たしかに、ひとがやらない本当に新しい問題を見つけることは非常に難しくなった。しかし、幸運はその用意のあるところだけを訪れる。用意というのは、ものを見詰める心構えであろう。マッチの棒1本の燃え方にしても物理の問題がある、というのはやっぱり本当である。

これからの物理学者たちが、このとりとめない感想から何かを考えて下されば幸いである。

を、昭和53年には、国際的な賞であるボルツマン賞を受賞されました。その他、学士院恩賜賞、仁科賞、松永賞、藤原賞等多くの賞を受けられました。

先生のお仕事は、物性物理全般にわたっており、上記の不可逆過程の理論の他に、ゴム弾性の理論、磁性の理論、特に磁気共鳴吸収の一般

論、金属微粒子の理論、非線型非平衡系における示量性の仮設の提唱、二次光学過程の確率論的取り扱い等数多くあります。それぞれ皆、バイオニアとしてのご研究で、それらはその後の発展に大きな貢献をしてきました。

久保先生は、学部及び大学院の教育を通して研究者の育成に尽力されると共に、学会や研究会で、講演者に対し、非常に基本的な問いかけと適切なコメントをされて、国内の研究水準向上にも尽くされてきました。その間、理学部長、物理学会委員長、学術会議委員、学術審議会委員、IUPAP 委員として、国内・外の科学行政にも熱意を示され、又、物理教室会議や理学部教授会では、広い視野に立ち、将来を見通した発言をされ、舵通りの役を果たしてこられました。

先生の講義は、近視眼的に部分的理解をするのが困難で、全体を眺めてやっと理解できる、大変芸術的なものとの定評があります。試験もきびしく、何度も追試をすることで有名でした。また久保研究室の院生に対して、夜遅く、難かしい研究テーマを出されて、翌朝早速、「あれ、どうなりましたか」と聞かれるので、これでは寝る暇もないと驚いた弟子達も多いと語り草になっています。

先生は、中学時代は文学か哲学が志望だったそうですが、中国文学者で台北帝大教授だった父久保天随氏に勧められて、理科を、それも純粹さにひかれて物理を選んだそうです。実際、先生は、大変格調の高い、含蓄の深い文章をお書きになることで有名です。久保先生は、幅広い読書家で、何かにつけて、物理以外にも私達教えられることが多かったと思います。先生は趣味も豊かで、静かに音楽を聞いたり、時にはひとりピアノをひいて楽しまれたり、絵筆をとってキャンパスに向かっておられたり、どこまでも純粹さを愛する方です。先生が海外出張の時、忙しい会議の暇をみてスケッチされた絵

を原画にして奥様が版画にされた年賀ハガキは、素人の域を出たもので、それを毎年頂戴するのを私達楽しみにしております。

久保先生は、大変人情深く、大から小まで何でも親切に相談にのって下さり、多くの人から慕われています。また、記憶力も抜群で、物理以外のことでも、ご相談した件の経過、処理について先生ご自身から時にふれ、お尋ねになることも多く、私達大変恐縮しております。私共、奥様にも大変お世話になりました。パーティのあとなどで、夜遅く先生のお宅に大勢で押しかけることも多く、いつも明るく迎えて頂き、感謝しております。特に、恒例になっている正月5日の先生宅での新年会は、大変にぎやかで、先輩や後輩とも一年ぶりに顔を合わせ、旧交を暖める絶好の場となっています。

先生は、還歴を迎えられた方とはとても思えない程若々しく、依然研究も熱心に続けておられるし、退官されるのはもったいない位です。久保理論を教科書で知っている外国の若い人に Prof. Kubo の話をすると、まだ健在かどびっくりするし、国内で先生の元気のよいご様子を拝見している人々には、先生が今年停年とは信じられないそうです。

久保先生は、東大を退官された後も、研究、教育、科学行政にと大いに活躍されることと思います。今までご指導下さいましたことを深く感謝すると共に、先生のご健康を祈って筆を置きます。



久保亮五先生

- 大正 9. 2. 15 出生
- 昭和 11. 3 東京府立第5中学校卒業
- 14. 3 第一高等学校理科卒業
- 16. 12 東京帝国大学理学部物理学科卒業
- 17. 1 東京帝国大学理学部における科学研究業務補助を嘱託
- 18. 4 東京帝国大学助手（理学部）
- 18. 10 } 東京帝国大学大学院（特別研究生）
- 20. 9 }
- 23. 2 東京大学助教授（理学部）
- 29. 12 " 教授（"）
- 43. 11 } 東京大学理学部長
- 46. 11 }
- 44. 6 恩賜賞
- 48. 11 文化勲章

地理学教室を“卒業”するに当って

佐藤久（地理）

早いものですね。これまで幾度となく繰り返してきた挨拶を、いよいよ自分が受ける立場になりました。改めて教えてみますと、教官として足掛け31年、学生時代からでは満39年、今までの人生の約3/4というものを本郷で過したことになります。十年一昔というくらいですから、平時でも30年、40年という年月には、世の中も人間関係も大きく変っているわけですが、ことに私達の世代が経験したこの年月は、現代史の激動期であり、その中での日本の演じてきた役割も格別に大きく、東大といういわば温室の中での生活にも、実にさまざまな出来事と変化がありました。

長年の念願であった二号館の改修もようやく終り、昔と同じように快く暖房のきいた研究室で、地図などをいじりまわしていると、こんな

に暑くては能率がさがってしまう、などとつぶやきながら、学生室のスチームを止め、窓という窓を開け放って歩いていたUさんの面影が眼に浮びます。窓の外には、常緑樹の木立に包まれて、当時の大学の迎賓館、懐徳館の姿がありました。Uさんは、その時切峯図面を画いていたその台湾の東方沖合いで、激しい空中戦を演じたのち、再び帰ることがありませんでしたし、銅葺き赤煉瓦造りの典雅な洋館の代りに、今は、コンクリートを打ち放しただけの資料館と東文研のビルが、日射しを障って高々とそびえています。

繰り上げ卒業と同時に、新しく制定された大学院特別研究生の一人として、徴兵延期という破格の扱いを受けることができた私にとって、戦後の人生は、戦場に消えた多くの青春を代償

として授ったものとしか思えません。それにしても、否、それにも拘らず、ほとんど無為に等しい歳月を重ね、見掛けは味気なくともそれなりの機能を果しているコンクリートの塊にも及ばなかった、というのが、残念ながら、この30年を振り返っての正直な感懐です。

私自身についての繰り返言はともかく、もはや教育界だけにしか存在しない、とか、学問を装った趣味、などまで極言されたことのある日本の地理学の中にも、この30年間には、いろいろと新しい研究が育ってきました。とくに自然地理学の分野では、第四紀の気候や地形変動の研究における進歩が著しく、関連諸学に対する貢献度の点でも、かなり胸を張れるようになったと思います。しかも、そうした進歩に、東大の教官や卒業生が果してきた役割は、極めて大きいものがあります。とはいいながら、ジャム双生児に似て、自然・人文の両分野が太い血管で結ばれあって成立しているという地理学の性格から、理学部にあるからといって、東大の地理教室が自然地理だけに特化することには、多くの問題があるようです。一方、そうかといって、僅か2講座の小教室で、地学・生物学から人文・経済・社会科学にまでまたがる広い範囲をカバーし、研究教育上の成果をあげようとするのは、至難の業といわなければなりません。東大の地理学はどうあるべきか。理学部の方々には馬鹿げたことと思われるでしょうけれど、これは私達の念頭をかたときも離れず、重く覆いかぶさっている黒雲です。思い切って分離手術を施し、自然・人文のそれぞれが自由の身になって、視野は広くなくとも高い研究業績の期待できる道を選ぶか、従来通り総合科学・境界科学としての立場を守るべきか、の議論は、地理学教室でも大学院の地理学課程でも、これまで飽きるほど繰り返されてきました。私自身は、一口に言って、地理学の看板を掲げる以上、双生児としての宿命は甘受すべきであり、また、

人間への環境としての自然という観点を放棄しては、自然地理学は存在し得ないだろう、と主張してきましたし、今もこの考えは変わってはいません。しかし、要は、地理学に現代社会が求めているものは何なのか、の見極めであり、これは、今後新しい教室スタッフのもとで、いっそう注意深く検討されねばならない問題です。その結果なお、引続き苦難の道を進もうということになるとすれば、理学部にもさらに、いろいろと御迷惑をおかけしたり、格別の配慮をお願いしたりしなければならないでしょう。

ところで私にとって停年退官とは、こうした悩みからの解放にも通ずるものです。もう胃の痛くなる会議も、レポート呈出もありません。今度こそ本当に地理学教室から“卒業”できるのです。論文を書くにしても、何をどのように料理しようとお叱りを受けることもないでしょうし、右顧左眄することなく我が道を行くことが出来るわけです。寂しくなりますね、といって下さる方もありますが、そして多分、次第にそうなるに違いないとは思いますが、少くとも現在のところは解放感で一杯です。この20年間、とくに東大紛争以来体調がすぐれず、心ならずもサボタージュを続けてきたおかげで、それまでアンデス地帯の調査で仕入れてきた見聞や資料が沢山溜っていますが、幸いにも最近、かなり精度の高い地形図や地質図が、また衛星写真なども利用できるようになり、それらの素材に肉付けする道が開けてきました。アンデスの地形学的知見に関しては、一部の地域を除いて、この20年来さしたる進歩はみられないようですし、古証文も十分役立つ様子です。研究を進める上で特別の機械や設備を必要としないことも、無冠の大夫の身にはありがたいことです。加えて、気楽な体になれば健康状態も少しはよくなるでしょう。いささか楽観的すぎる嫌いもありますが、このような次第で、今後は気まま且つ“趣味的”ながら、アンデスの地形

ないし自然地理のまとめに従い、多少なりとも  
これまでの怠惰のつぐないをしようと考えつつ、

差し当っての数年ほどの年次計画などを夢想し  
ている今日この頃です。

## 佐藤先生お元気で

阪 口 豊 (地 理)

佐藤先生 私が地理学科に入学した時、たしか先生は講師だったと記憶しております。ですから、先生とお呼びするのが礼にかなっているのかも知れませんが、ここでは佐藤さんと呼ばせて頂きます。その方が、師弟関係を少しも感じさせない、ざっくばらんなお人柄に相応しいような気がするのです。そういえば、私が入学した頃の教室の普通の会話では、先生付けで呼ばれるのは学生の方で、エライ先生方はすべて「さん」付け、一番エライ辻村先生にいたっては「大将」とか「御大」(おんたい)とかいって御名前すら呼びませんでした。

私は相当に生意気な学生で、佐藤さんには直接間接にずい分楯突きました。そんな私に、院生時代に署名入りの御著書を2冊下さいました。覚えておいででしょうか？ その御著書は今でも懐かしく、時折手にしています。その一つ、

1950年に日本写真測量学会(古今書院発行)から出された「空中写真による土地調査と写真の判読」は、今日、地理学の分野では不可欠の研究手段になっている空中写真の判読法の、当時、海外にも類例を見なかった系統的な解説書なのですが、地理学教室の図書室にも無く、知る人も少なく大変に残念でなりません。空中写真を御専門の地形学に応用しようという御構想と実践は、まだ学部学生であった1943年に8ヶ月にわたって、故田山利三郎博士の調査団に加わってニューギニア調査に行かれた後、陸地測量部の囑託になられた時からであったと伺っ

ております。その後、珊瑚礁、カルスト地形、火山、断層地形、あるいは1958年から着手されたアンデス山脈の地形研究に、空中写真を駆使された御研究の成果を次々にあげられました。しかし、ニューギニア調査の際、不幸にして罹患されたマラリアのため、その後必ずしも十分な御健康に恵まれず、お仕事の多くが未完成であることが惜しまれます。

かつて一時期、私は佐藤さんと同じ部屋で過ごしたことがありました。その頃佐藤さんはアンデス山脈の研究に没頭しておられ、図上作業に明け暮れておいででした。世界最長山脈の作業の結果が、少しずつトレーシングペーパーのロールの太さの変化となってあらわれていくのが印象的でした。“学問ノ道ハ長ク退屈デアリ忍耐ヲ要スルコトハ並大抵デハナイ。”(教室日誌、第14号、1944.8.7、佐藤記)

佐藤さんは大変なはにかみ屋で、何事にも控え目な御性格の持ち主ですが、言うべきところは歯に衣きせず、ずばりと意見を述べられる、学生にとっては大変こわい先生でした。佐藤さんほど丹念に卒業論文や修士論文を読まれる先生はおそらく少ないでしょう。私などは論文の余白に書き込まれた佐藤さんの寸評を読むのが楽しみで、論文の回覧が佐藤さんの後になることを願ったものです。辻村先生時代から行われている、全教官と全学部学生が一堂に会して毎週行う学部ゼミ、自然地理学関係の全教官と自然地理学専攻の全大学院生とで行う大学院ゼミ



でも、佐藤さんの舌鋒鋭い質疑には大ていの学生はタジタジでした。しかし、寸評にしろ、討論にしろ、単なる批判のための批判ではなく、学生の将来を考えた教育的配慮の行きとどいた内容でした。

私は、そんな議論好きな御性格をすでに大学院生時代からお持ちであったことを教室日誌で知りました。1936年に第1号が書かれてから今日まで、地理学教室の学生によって大学ノートに書かれた日々の記録と感想、意見、教師へのうらみつらみの数々が、すでにミカン箱一杯になって教室に保存されています。第1号の4ヶ月に1冊というケースを除くと、通常6~10ヶ月に1冊の割合で書きためられてきましたが、佐藤さんが「院長」吉川さんが「副院長」小堀さんが学部学生であった1944年の夏には、談論風発し、第14号は7月31日から9月30日の2ヶ月間に、署名不要なほど特徴のある文字でびっしりと埋められるという、空前絶後の事態が起っています。この号に書かれた佐藤さんの文章には、敗戦の色濃い1944年の異常な事態の下で書かれたものであるにもかかわらず、35年余の歳月を感じさせない新鮮さをもってわれわれ地理屋の共感を呼び起こさずにはおかないものがあります。私はその透徹した主張に驚き頭が下がる思いがしました。せっかくの機会ですから、後輩のためにここにその一部を引用させ

て頂くことをお許し下さい。

“地理学トハ、此等現在ニ於ケル極メテ専門化シ、オ互ニ甚シク遠ザカッタ諸学ヲ綜合シ一ノ学トシテ組合セタモノヲ意味シマス。……地理学ナル綜合科学ノ中ニ含マレル専門学ヲ夫々ノ専門学トシテ深メルノデハナクシテ、アク迄モ総合的ニ相互ニ関係アル学ヲソノ関係ヲ保ッタママ、否、更ニソノ連関ヲ強メツツ深メルコトヲ意味シマス。……モトヨリ地理学ヲ上ニ述ベタ如キ意味デオサメ、進歩サシテユクタメニハ困難ハ多イデセウ。然シナガラ、ソレヲヤリトゲルコトナクシテハ地理学ノ真ノ発展ハ不可能デアルト思ヒマス。カクテハ地理学ナル母ハ夫々ノ息子ノ生長ニ一ノ望ヲ託シテサビシク墓穴ニ入ルノミデス。然シ地理学ハ母ナルガ故ニ子供ト共ニ永久ニ生キルコトハ出来ナイデアラウカ。私ハ断ジテ否ト考ヘマス。此ノ母ヲシテ死セシムルカ、尚潑刺トシテ活躍セシムルカハ我々ノ努力如何ニアルト。”（教室日誌、第14号、1944. 8. 14）。

私には先生の御健康のことがどうしても気掛りでなりません。健康を保つには若い人達と絶えず接していることが第一かと思います。どうかこれからも教室にお出掛け頂き、私たちをはじめ学生達と議論して下さいを願ってやみません。そして未完成のお仕事を完成されることを期待しております。



佐藤 久 先生

- 大正 9. 4. 1 出生
- 昭和 13. 3 秋田中学校卒業
- 16. 3 水戸高等学校理科甲類卒業
- 18. 9 東京帝国大学理学部地理学科卒業
- 18. 10 } 東京帝国大学大学院
- 23. 9 }
- 24. 12 東京大学講 師 (理学部)
- 27. 8 " 助 教 授 ( " )
- 36. 3 " 教 授 ( " )

## 雑 談

浅 田 敏 (地球物理)

この35年は実に長かった。あと又35年生きるとすると95歳になるわけである。95歳まで生きる心配はなさそうだが、小生はもともと楽観的なたちなので若しかしたらそれまで生きるかもしれない。この数年間の時間のながれは予想に反してのろかった。一体あと35年を退屈しないで暮して行くには何をしたらよいのだろうか。

あまりつまらないことを考えないで、年なみに昔のことを思い出して見よう。筆者の人生にとって最初の一大事は旧制高校のときに結核にかかったことである。学校は落第しない最小限の日数しか出席しなかった。

この病気は18歳のときに始まって大学卒業位までつづいた。なんともいえない程つらい生活であったけれど、当時、ことに旧制高校時代には今日では考えられないほどの大量の本を読んだ。思い出して見ると若々しいのしさに満ちていたような気もする。

そのころ結核にかかった若い人、我が友人達、はほとんど全部死んでしまった。ところが筆者はどうしたわけか、10人か20人に1人位の割合でしかない生き残りの仲間に入ることに成功した。

大学を出てから2～3年したころ、又この病気が再発し、なおるのに35歳までかかった。この時無事にきりぬけられたのは化学療法が出現していたからである。

さて学問の方のことであるが、ふりかえって考えて見るに大学卒業後10年くらいはあまり大した論文は書いていない。しかし1950年代のおわりに書いた微小地震の存在と性質、ならびにその観測方法についての論文は大成功であった。

このとき用いた *Microearthquake* と云う和製英語は鈴木次郎さん(東北大学教授)とともに考えたのであるが、今日世界中の地震学界に氾濫している。

1970年に第一号型の海底地震計を作った。それまで実的に役にたつ海底地震計は殆どなく、観測網は陸上にだけしかなかったので海の底で地震波を観測すると面白いように新しい事実が見つかった。以来10年間我々の地震計は少しずつ新型になり、新しい結果が蓄積しつつある。これから製作される新型もある。

世界中を見わたすと随分ドジな海底地震計を作っているグループもあるので、我々の評判は比較的よい。まだ論文のかたちで発表はされていないが、海洋底では100キロ位の深さにまで異方性が存在するらしいことがわかって来た。今までは数キロ位のごく浅い所のみ異方性がみとめられていたので、深部までの異方性が証明されると中々の大事件になるのではないかとたのしみにしている。

1960年代の10年間には何をしていたか考えて見ると、主として日本における爆破地震動観測の組織づくりと測器の進歩の推進をしていた。むだに時をすごしていたわけではないと自らなぐさめている。

地震学における最大の問題の一つは地震予知であろう。ところが筆者は地震予知の研究は一度もしたことはないし、従って論文を書いたこともない。それにしても予知についての論評文はたくさん書いているし、社会活動も多すぎるようである。研究者としてのバランスはくずれている。地震予知と云うものは不思議なものである。まだ科学にはなっていないのだと思う。

予知研究のためにつかわれる金額はかなりのぼっている。しかし地震予知研究にも、もしかしたらまだ「穴」がのこっているのではないかと云う気がする。つまり小額の資金とよい考え

さえあれば重要な結果を得ることが出来るかもしれない。もし本当にそうだとすれば、筆者にとってもこれからのたのしみがあると云うものである。35年ぐらいはもつかもしれぬ。

## 浅 田 敏 先 生

佐 藤 良 輔 (地球物理)

浅田先生は昭和19年9月地球物理学科を卒業された。この年は戦争も末期の頃であり、2年半の在学で卒業となったと伺っている。卒業後直ぐ助手になられたが健康を害されて、私が後期(3年)の学生で研究室に入った頃は大学で余りお見かけしなかったのを覚えている。昭和41年教授になられた。今は至極お元気である。今春退官されるというのは、まだまだ早過ぎるというのが実感である。

地震予知協議会議長、地震予知連絡会副会長、測地審議会副会長、国際協力事業特別委員会・地球内部ダイナミクス計画分科会委員長、極知研究所運営協議会・地学専門委員会委員長、……。〇〇委員というのは非常に数が多く、とてもここには書き切れない。これが浅田先生の、東大関係以外の所謂肩書である。とにかくお忙しい方で、正に神没鬼没、居所をつかまえるのが楽ではない。そばにいるこちらの方で音を上げて、予定表を書き入れる黒板を差上げたが、矢張御自分の手帳に絶対の信頼を置かれているようで、黒板は一向に使用されない(この黒板は、今や院生の手によって啓蟄とか大寒とか書き込まれて研究室の片隅に空しく吊り下がっている)。

大学に居られる時でも机の前に坐っている姿は滅多に見かけない。実験室に居るのでなければ、院生の部屋で何かお喋りをしているか、或

いは部屋から部屋を飛び廻っているかである。先生の部屋は、3号館特有の大きい部屋を半分にした鰻の寝床といった感じの部屋である。先生は自ら部屋に到着かぬ事を自覚されている様で、自分からその様な部屋を選ばれたのである。話の好きな、従ってまた話の上手な方で、私共はひそかに先生は口から先に生れたのに違いないと評している。一方私の方は、一日中机にしがみついでいて(先生の言によれば)、どちらかといえば喋るのも面倒臭い方である。従って遺憾ながら先生と私には余り「会話」がなかったといわざるを得ない。そこでこの小文を書くのに、研究室の連中に先生の事をいろいろ語って貰った。

「先生はアイデアの塊である」「先生の云われる“すぐできる仕事”は実際にやって見ると少くとも1年はかかる」「ソ連で向うの海底地震計を見て来られて“あれ位ならすぐにも出来る”と云われていたが、実際に短い期間で独自のタイプの小型海底地震計を完成し、海底地震の海底における観測を可能にして数々の成果を挙げているという事実は、先生の“すぐ出来る”は必ずしも豪語だけではない事を示している」「先生への悪評は殆ど聞いた事がない。あるとしても、それは何時も笑顔と共に語られている」「先生の話の聞いていると、今学問の話をしていたと思うともう自動車の話になっている。オ

オーディオの話をしていただと思うと何時の間にか外国の美人の話になる。慣れないとなかなかフォローできない」「講義もそういう傾向で、今ノートを見るとあっちこちに話が飛んでいる」「研究室に置いてある加湿器を見て“これは超音波を出しているから何でも綺麗になる”と水槽に眼鏡をつけたら縁に月面のクレーターの様なヒビが入ってしまった。しばらく残念そうな顔をされていたが、金属なら大丈夫だといろいろな物を放り込んで“実験”に専念されていた」「時に審美眼を疑いたくなる様な美人評をされる事があるが、相当なフェミニストである事は確かである」「たまにいい服を着て来ると大抵気がついて賞めて下さった」（これは女子院生の話）。

以上の話からも分る様に、浅田先生は大変気さくな方で、若手の研究者に対しても全く対等に、そして真正面から対応される。近づき難いという雰囲気は全く持って居られない、誰にでも親しまれる方である。研究室では誰もが、退官されても相変わらずの雑談（学問の話も含む）



をなさりに毎日でも大学に来て下さる様願っている。

先生の御性格の事ばかりで、学問の事には余り触れないでしまったが、残された紙面で少しばかり書くと、古くは微小地震（micro-earthquake という名前の入った論文は先生のが first paper であると、外人が review のなかで指摘していた）の研究を始め、爆破地震動観測による地殻構造の解明でも指導的役割をつとめられて来たし、また最近では、上に述べた海底地震計の開発、更に御自分でも船に乗られて海底地震計の設置も精力的になされている。地震予知の研究でも重要な役割をなされている事は衆知の事である。先生の御元気さと研究に取り組む御熱意を拝見するにつけ、今ここで退官される事は甚だ残念であると思うのは私共ばかりではあるまい。

先生は昨暮北大在学中の御長男孝君を事故で失くされた。先生御夫妻のお嘆きは、はたで見て胸が痛くなる程であった。筆を措くに当り謹んで御冥福をお祈りする次第である。

### 浅田 敏 先生

- 大正 8. 12. 15 出生
- 昭和 12. 3 東京開成中学校卒業
- 17. 3 静岡高等学校理科乙類卒業
- 19. 9 東京帝国大学理学部地球物理学科卒業
- 19. 9 東京帝国大学助手（理学部）
- 30. 12 東京大学助教授（"）
- 41. 4 " 教授（"）
- 54. 4 東京大学理学部附属地殻化学実験施設長

## タイベ・オアシス

小堀 巖 (地理)

一昨年(1978年)の7月から8月にかけて、「海外学術調査」によるシリアのフォガラ涵養オアシスの調査を行う機会があった。(ここでフォガラというのは、イランなどではカナートとよばれている地下水道による用水体系を指す)

タイベは、遺跡として有名なパルミラから更に約110キロメートルほど北東にある人口約600の小さいオアシスである。パルミラに行くにはシリアの首都ダマスカスから車で4~5時間かかり、それからタイベまでは、道が悪いので3~4時間の時間帯である。パルミラから先は、まったく公共の交通機関がないわけではな

いが、週に一度のバスではほとんどないにひとしい。ここは広義のシリア沙漠のど真中ともいうべきところで、年降水量は150ミリメートル前後、植生からいえばステップ沙漠といった方が近い説明かもしれない。オアシスそのものは、高度約660メートルのシェイク・イブラヒムの山麓扇状地の上にあり、タイベの集落自身は、テルとよばれる人工の丘の上に立地しているものが大部分で、一昨年訪れた折にはその前面の低いところに新しい家屋が次第に建ちつつあるころであった。

私自身、既に1967年に一度一晩泊りで訪れ



ネブカ (パルミラ南部)

たことがあり、それから10年以上たった一昨年に同じ場所をみて、最初に気がついたのは、ネブカの成長であった。ネブカというのは、アラビア語の元来の意味は「もりあがったもの」ということであるが、アラビア湾岸の海岸沙漠や、シリア沙漠などでみられる灌木その他の植生の近くに形成された小さな砂丘(群)のことを指す。ネブカの成長する原因はいうまでもなく、

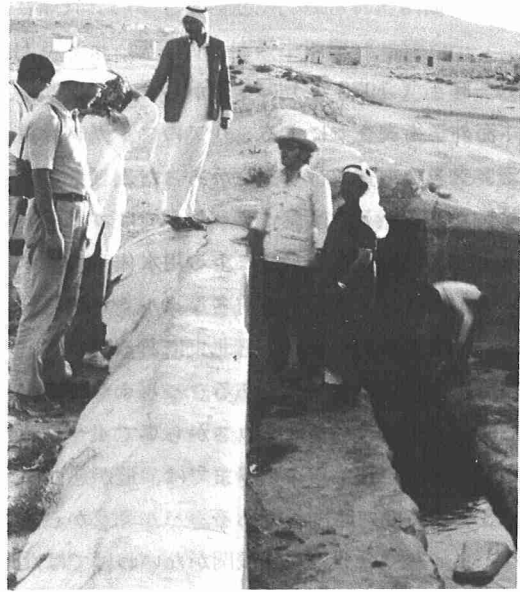
砂の供給量が増えることであり、それが何を意味するかは乾燥地を扱う場合には、極めて重要な議論のポイントである。

村人達の中には、推定年齢90歳に近いと思われるジョルジと呼ばれる老人がおり、私達を歓迎してくれた。私達の調査の目的はこのオアシスの水源から末端の農地にいたるまでの水利体系と、その基盤としての自然環境、及びオアシ

スの社会環境の総合的把握にあった。これは、口でいうのはたいへんやさしいことであるが、このような総合的把握はよほどの達人が一人でやるか、或いは、すぐれたチームワークで補充するかのどちらかの方途を選ばなければ、まずは実行不可能である。幸いにして、研究協力者にすばらしい人材を得て、後者の方向で、無事実地調査を終えることができた。

ところでこの期間はシリア沙漠でも五十年來という高温が続いて、特に7月の初旬から下旬にかけては、日中の外気温は50度近くになり、夜アドベ風の宿舎で寝をとるにしても、高温のために眠られない。(7月のある期間は、夜間室内でも体温以上の温度が続いた)従って仕事は、朝5時起床、6時出発、10時にはもう現地作業を終えて宿舎に帰り、あとは昼寝で体力の消耗を防ぐ。夕方から一日の仕事のとりまとめを行うといっても、5時位ではまだ日射が強く、室内では仕事もできない日々が3週間近く続いた。

水の調査に行って、水に困るのも何かの因縁で、あしかけ2カ月の調査期間中、風呂は勿論、シャワーなども一人一回あったかなという程度。その理由はいたって簡単で、水を買うからである。私達の宿舎はタイベから11キロメートルほどはなれた、カスル・ヘイル・シャルキとよばれる離宮趾の外側にあり、日常生活の水は、タイベからくる売水トラックに依存していた。宿舎の前に、コンクリート製の地下水槽がある。私達が以前訪れた時に、無人の頃の名残りか、乾燥した鶏が一羽、底に鎮座していた。日本からの調査団員は5人だが、シリア側のリエゾン・オフィサーが2人、それに運転手、コックと総勢9人、これだけの人間が使う生活用水を大体3~4日分位貯水しておくのであるから、とてもシャワーなどへはまわらない。水質そのものは、それほど悪くないが、沈殿物を取り、しかも蒸発熱を利用して冷却するために素焼の壺



タイベの主要カナートの出口  
(後の山は、シェイク・イブラヒム)

に使用水を入れて放置しておく。冷蔵庫の水のようにはいかないが、それでも相対的には、冷たくなり、ベイルートから、ときどきダマスカスのスーク(バザール)に入ってくるレバノン製の粉末ジュースなどをとくして飲むことができた。

このような高温乾燥の年には、遊牧民達は遠くの草地を求めて、オアシスの周辺から離れてしまう。このあたりは文字通り、農耕民と遊牧民との併存の地帯であるなどと教科書的に考えていると、日本では、とても考えつかない事実がみつかると。例えばタイベの家族数は約60、そのうちタイベ・オアシスにある畑での水利権をもっている者は約三分の一位。そうするとあとの人々は何で生活しているのかということになる。これはそれこそ古代オリエント時代から変わらない、シリア沙漠を中心として、東はペルシャ湾から、西は地中海に至る東西交易の仲継

地としてのオアシスの重要性があらわれてくる。タイベの附近では今でもローマングラスや、ローマ時代の貨幣は勿論、ビザンチン、イスラームの各時代の遺物がたやすくみつかるし、タイベの人々には東のイラク、南のクェート、サウディアラビアなどとの間にある国境など、あってもなきものに等しく、収入を上回る現金収入の途としては、産油国の兵隊や、タクシーの運転手、油田や、土木労働者などがあり、又、合法と非合法とのすれすれの線で、時には、自衛の護送用車をも伴ったいわゆる、密輸(?)の手伝いをする。もっとも、これは、古代の塩や絹が、

トランジスターラジオやタイヤに代ったといった方が理解しやすいかもしれない。こういった農耕と交易とを主体とし、それに、豊富な地下水を買いにくる周辺の遊牧民を相手に生活する生き方というものは、おそらく何十世代にも渡って動いてきたものであろうか。現在住んでいる人達の居住史は、近々半世紀たらずであるが、その前に、数十年の荒廃期があり、それ以前の状況については、断片的な旅行記などで推察すると、基本的には、水源をもち、バーディア（ステップ沙漠）で遊牧民と共生しているという生活様式は、かわっていないようである。約



井戸修理の仕事を手伝う村の子供達（タイベ）

半世紀にわたる村の人々の生活を追っていくと、ここでもオアシスの周辺の生態系の破壊が問題であった。人によって、10年といい、20年といい、時間のスケールが違うが、昔はもっと草の背が高く量も多くあったことをしきりにくり返す。彼等の説明によれば、周辺の遊牧民がかなり無計画に過放牧を行ったためだという。（この話をしてくれた一人も、約500頭の羊をもち、あちらこちらの牧草をもとめて放牧していた）ネブカの成長にみられるように、乾燥化といわれないまでも、「旱魃」の問題が存在したことは、記録の面でもはっきりしておるので、草の減少は人為的な理由だけからでの説明は不十分かもしれないが、雨の多寡に敏感なバーディアの人

々の心の一面を物語っているといえよう。

地下水に完全に依存せざるを得ないこのタイベ周辺にも、ユーフラテス川からの運河によって水を引いてくる話題も出ており、パルミラの軍事基地から訓練用のミグ戦闘機の姿を時には観察できる。バーディアの中のオアシスをとにかく社会環境は、やはり時代と無関係ではいられない。来年早々、もう一度冬季の水利用を中心に補足調査を行う予定なので、村人達との再会が今からたのしみである。研究室での読書だけでは空虚にすぎない、乾燥化や乾燥地の環境整備の問題などもふくめて、もう一度ここでバーディアの自然と人間を水を媒介にして考えてみたいと思っている。

# カキの生活戦略

鎮西清高（地質）

カキ（オイスター）は世界中で最もポピュラーな海産物ではないかと思う。高緯度地域を除いて世界中どこかの海岸にも生息し、どこでも食用にしている。各地に名物のカキ料理があることも御承知の如くである。水産上重要なのでカキに関する論文も多い。1966年に発行されたカキ文献集には12,000ほどの論文がのっているが、これには欧米以外の各国の水産試験所報告の類があまり収録されていないので、これも数えると大変なものになろう。人間は別格として、一つの種類でこれほど多くの論文の対象になっている生物は他にないのではあるまいか。

ところが、これほど数多くの研究があっても、カキという生物の全てが一通りわかっているというわけでないから不思議なものである。カキの化石も色々な時代の地層に知られている。それも無数の殻が集って巨大な塊りをつくることが多い。私が見た最大の塊りは径500m、厚さ10mにも及び、少なく見積っても50億ヶを越す個体が集っている。だが現生のカキを扱った論文の中に、カキが何故このような巨大な集合体をつくるのか、どのような過程で集っていくのかを調べたものは見当たらない。そもそも、今海岸で見られるカキはほとんどが養殖ものか、さもなくば養殖場から逃げ出した仔がその付近で細々と生きているものばかりで、天然カキの大群落は世界中にほとんど見られなくなっている。これは多分人間がとって食べてしまったためであろう。私の知るかぎりそれが見られるのは、北海道厚岸湖と北米メキシコ湾岸の潟湖の一部だけである。厚岸湖はせまい水路で海と連絡している汽水湖で、ここでは生きているカキが集って島をつくっている。

カキ（正しくはマガキ属のカキ）は、元来岩や他の貝殻などの固い物体に殻の一部をセメントして固着し、エラで海水を汲して、海水中のプランクトンや有機物を集めて食べている動物である。このような生活様式の動物は岩礁地帯に多いだろうと考えるのが常識的な判断であろう。所がカキは、岩礁にもいるが、大群落をつくっているのは例外なく遠浅の干潟の、人がふみ込むとどうにも動きがとれなくなるようなドロ泥の場所である。化石のカキ群落も同じような泥の地層からみつかる。ドロ泥の所では、まず付着するための固い物体がほとんどない。それに次々と積る泥に埋められたりエラが泥でつまって窒息する危険が大きい。しかし、カキは動けないからぬけ出すこともできない。およそ彼らにとってこんな不都合な生息環境はないと思われるのだが、現実にはそこで大いに繁栄しているのである。

化石のカキの生態を調べているうちに、その秘密は、実は他物に固着するという一見干潟の生活にはおよそ向かないと思われるカキの性質にあることがわかってきた。

たしかに、一度固着したカキはもはや動くことができないので、どんどん泥に埋っていく。厚岸湖で調べてみると、殻の半分が泥に埋ると死んでしまう。しかし彼らは生きているうちに大量の子供をつくる。マガキの仲間は精子と卵子を海中に放出して海中で受精し、生れた幼生はしばらく浮遊生活をおくる。浮遊生活期を過ぎた幼生は、干潟の泥の中で唯一の固い物体ともいえる親の殻の上に付着して生長を始めるのである。親は泥に埋れて死んでも子供は泥の上に顔を出している親の殻の上に固着して埋れるの



を免れる。こうして、親ガキの上に子ガキ、子ガキの上に孫ガキと次々に乗かって、全体として上へ上へと伸びていく。実際に長い棒のように連なったカキが地層の中に立ったままで見つかることがある。

仲間のカキが周囲に多ければ多いほど子ガキにとって足場が多いことになり、こうして大きなカキの群落ができあがる。こうなると子ガキにとってはそこは岩礁地帯と同じことになる。そして一見まことに不都合と考えられる干潟の環境は、食料が豊富で、かつ水を汙して食料を集めるタイプの競争者が侵入できないために、カキにとっては楽天地となる。

カキが干潟で生活できる性質を獲得したのは、中生代の終り近い1億2千万年前頃と思われる。このような特殊な、しかし実に要領の良い生活様式のためであろうか、その後カキは形態的にはほとんど進化していないように見える。恐らくその環境にぴったり適応していて、これ以上変わる必要がないのかもしれない。

所で最近実に異様カキの化石を発見した。普通のカキがせいぜい20~30cmの大きさ（生ガキとして食用にするのは稚貝）なのに、この化石カキは長さが1mを越し、細長い棍棒状である。殻の大部分は炭酸カルシウムで充填された棒で、

肉体はその上端部におさまっている。殻の構造や生長様式を調べたところ、どうやらこのカキは泥に埋って死ぬのを防ぐために、埋ってしまった若い時の殻を泥の中に残して、殻を分泌しながら肉体だけが上へ上へと移動したものと考えられるのである。恐らく100年位いは生存していたものらしい。このカキは、およそ1億年ほど前にカラフトから東北地方にかけて生息していて、その後姿を消してしまった。

普通のカキが泥中で固着生活をするために、親を足がかりとして次々と世代を重ねていくのに対し、このカキは1つの固体が長生きして自らの殻を長く長く積上げていく。この2つの生き方は、どんどん泥が積るような環境で固着性生物が生活するための、可能な2通りの戦略を示している。皆さんは、一体どちらが利口な戦略とお考えになるだろうか。

個体が長く生長するタイプのカキは、はるか昔に姿を消してしまっているのに、子が親を踏み台にするタイプのカキは1億年以上を生きぬいて、現在（人間が食べてしまわなければ）世界中の干潟で大群落をつくり、大いに繁栄している。自然は壮大な実験をやってどうやら解答を出しているようである。

## “数学は目の科学である” —オイラー（補）

小 嶋 稔（地球物理）

理学部広報一月号で、「数学は目の科学である—オイラー」という駄文を寄稿いたしました。その後これをお読みになった天文学教室の本木たい子さんが、オイラーの話に興味をそそられ、高木先生の「近世数学史談」をお読みになったということです。ところが小生の引用(?)した上

述の逸話は見当らなかった、という御話を人伝てに伺いました。全く私の思い違いらしく冷汗三斗の思いです。

私が高木先生の御本を読んだのは今から三十五六年程も前、つまり終戦直後、まだ中学3~4年の頃のことでした。たしかあの「近世数学

史談」は、戦前に共立出版から発行されたもので、闇市の古本屋で見つげわくわくして読んだのをおぼえております。その印象があまりに強烈だったため、何か別の本 — あるいは小堀先生のこれも往年の名著“大数学者”（また間違ったらお許し下さい） — で読んだ話と混乱してしまったのかも知れません。どちらの本も転々と居を変えるうちにどこかに無くなってしまいました。今となっては、例のオイラーの逸

話の出典をしらべるすべもありません。理化学辞典でしらべてみると、オイラーはたしかに盲目でした。この盲目の大数学者オイラーの箴言としての“数学は目の科学である” — は私の勝手な“創造”にしては、あまりにもよく出来すぎの様に見えますので、やはりオイラー自身の言葉でしょうか！

どなたか出典につき御教示下されば幸甚です。冷汗頓首。

## 就 任 御 挨拶

田 村 文 雄（事務）

前新井事務長の後をうけて、1月16日付で理学部事務長に就任いたしました。

私は、学部経験が始めてであり、しかも機構が大きい本学部にまいりまして何かと戸惑うことの多い毎日です。前事務長は、頭脳明晰で、敏腕をもって聞こえた方ですから、その後を引継いだ私としては身の引締る思いをしております

が、一日も早く環境に慣れて、先輩事務長各位の足跡を汚すことのないよう、手腕の不足は誠実をもって補い、努力してまいりたいと思います。

皆様方の温かい御支援と御鞭撻を切にお願い申し上げます。

## <学部消息>

### 教 授 会 メ モ

1月16日（水）定例教授会

理学部4号館 1320号室

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 理学部規則の一部改正について
4. 教務委員会報告
5. 大学院総合計画委員会報告
6. その他

2月20日（水）定例教授会

理学部4号館 1320号室

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 学士入学について
4. 転学部について
5. 昭和55年度受託研究員の申請について
6. 評議員改選
7. 植物園長選出

- |                       |                  |
|-----------------------|------------------|
| 8. 素粒子物理学国際協力施設長選出    | 13. 人事委員会報告      |
| 9. 中間子科学実験施設長選出       | 14. 会計委員会報告      |
| 10. 地殻化学実験施設長選出       | 15. 教務委員会報告      |
| 11. 人事委員会・会計委員会委員半数改選 | 16. 新入試制度検討委員会報告 |
| 12. 企画委員会報告           | 17. その他          |

## 人 事 異 動

(助手)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異 動 内 容 (備 考)
植 物 園		邑 田 仁	55. 1. 16	助手に採用
化 学	助 手	磯 谷 順 一	55. 1. 10	辞職

(講師以上)

情 報	助 手	川 合 慧	55. 2. 16	講師に昇任
"	講 師	榎 本 彦 衛	55. 2. 16	助教授に昇任

(一般職員)

事 務	事 務 長	田 村 文 雄	55. 1. 16	配置換 (原子力研究総合センターから)
人 類	事 務 官	小 黒 美穂子	55. 1. 16	配置換 (庶務部から)
中 間 子		佐々木 英 行	55. 1. 16	文部技官に採用

## 海 外 渡 航 者

所 属	官 職	氏 名	目 的 国	期 間	目 的
素粒子	助 手	駒 宮 幸 男	ドイツ連邦共和国	1. 10～ 56. 1. 9	国際協同実験 J ADE 参加のため
臨 海	助 手	佐 藤 寅 夫	インド	1. 19～ 2. 17	FAO/DANIDA 西部インド洋海産漁業生物の野外同定に関する専門家会議出席のため
人 類	教 授	尾 本 恵 市	アメリカ合衆国	1. 13～ 1. 19	人類集団遺伝学に関する日米科学協力セミナー出席のため
物 理	教 授	桑 原 五 郎	中華人民共和国	1. 31～ 2. 14	現代化過程における中国の教育・研究の視察のため

所属	官職	氏名	目的国	期間	目的
地物	助手	浜野洋三	アメリカ合衆国	1. 21～ 56. 1. 20	岩石磁気学に関する研究のため
地物研	助手	三浦彰	アメリカ合衆国	1. 27～ 2. 14	高緯度電場に関するチャップマン会議出席および超高層プラズマ物理学に関する研究連絡のため
化学	教授	藤原鎮男	アメリカ合衆国	1. 26～ 2. 6	化学における情報科学の研究のため
化学	助手	梅沢喜夫	アメリカ合衆国	1. 26～ 2. 6	電気化学に関するゴードン会議出席および分析化学に関する研究連絡のため
地物研	助教授	小川利紘	インド	1. 26～ 2. 29	日食観測および超高層大気に関する共同研究のため
地物	助手	中村一	インド ネパール	2. 2～ 2. 20	気象・生物工学における最近の計算機技術に関する仏・印共同研究会出席およびヒマラヤ地域の気象研究の調査のため
動物	助教授	川島誠一郎	オーストラリア	2. 7～ 2. 20	第6回国際内分泌学会議出席および内分泌学に関する研究連絡のため
天文	助手	家正則	カナダ	2. 22～ 5. 21	銀河の定量解析の研究実施のため
物理	教授	久保亮五	中華人民共和国	2. 20～ 2. 28	物理学に関する研究交流のため
物理	教授	山崎敏光	中華人民共和国	2. 20～ 2. 28	物理学に関する研究交流のため
化学	教授	向山光昭	アメリカ合衆国 メキシコ	2. 22～ 3. 6	有機合成化学に関する研究連絡のため
化学	教授	朽津耕三	アメリカ合衆国	2. 17～ 3. 7	準安定希ガス原子と気相及び凝縮相分子間のエネルギー移動過程に関する共同研究実施および第8回オースチンシンポジウム出席ならびに化学に関する研究連絡のため
物理	助手	天埜堯義	アメリカ合衆国	2. 22～ 3. 3	レーザー分光学に関する調査研究のため
物理	教授	有馬朗人	アメリカ合衆国	2. 23～ 3. 6	回転帯構造と原子核の動力学についての国際会議出席および原子核理論に関する研究のため

## 留 学 生 懇 親 会

2月25日(月)の夕刻、山上会議所で理学部および理学系大学院の留学生、客員研究員を招待し懇親会が行われた。外国人学生委員野田教授の歓迎の辞に続いて、理学部長西島教授の「日本の天気をなんとかしてほしいといわれても困るが、できることはなんでもするから云ってほし

い……」という話があり、刺身などをさかかにビールの杯を傾けつつ歓談が行われ、留学生の許東俊(地球物理学)氏の挨拶があって会を閉じるまで二時間をなごやかにすごした。参加者は七十名を越えた。



懇 親 会 場 に て

ほたるの光まどの雪  
ふみよむ月日かさねつつ  
いつしかとしをすぎのとなを  
あけてぞけさはわかれゆく

とまるもゆくもかぎりとして  
かたみにおもうちよろずの  
心のはしをひとことに  
幸きくとばかりうとうなり

---

編集：

飯 高 茂 (数学)	内線 4053
平 川 浩 正 (物理)	4141
小 平 桂 一 (天文)	4258
露 木 孝 彦 (化学)	4357
鈴 木 秀 夫 (地理)	4575

---